

第十九章 帰途

まごう 名 物 2073 2066 見込 2557 263

情 次 47

1409 P

ちりは ひとえに 1418 P

1418 P
並々 556
尋常 255
1416 P

大 名 砂 情 1416 P

改行

改行

改行

いよいよ洛陽の都を後にして、祖国邪馬台
国へと、道をたどり帰る日となった。
洛水にかかると、夢かと紛うばかりの美しい浮
橋が、難^な米^との目に^た滲^たんで揺^ゆういで見えた。
へいっか再び、この洛陽の土を踏むことが
あるのだうか
いまはただ、名残り惜しく、切なくてなら
かった。洛陽の都でのさまたげな思ひ出が胸
に込み上げてくるのだった。
「洛陽の都は、さすが華麗極まりない名
都でございます。この花の都洛陽で、まるで
夢^{ゆめ}ちりはめたかのような楽しい毎日を過^{すご}させていただきま
した。が、それはひとかた^は並^なならぬ格^{かく}
別のおとりはからいがある、たからです。おれ
の申し上げようありません。その上、いま
またこのようにお見送りをいただきまして、
まことに有難^{ありがた}く感謝^{かんしゃ}申^{まう}上げます。名残り惜^{なごりお}
しく、去^さり難^{がた}く思^{おも}います。しかし、使命^{めいしん}を全^{ぜん}

改行 2行

全うすに

改行 2行
つぎだ

飛沫 2248
1010

船首 2266
1410

機師 523

ダブル
11

うせんがため、万感の思いを胸に、私達はこ
れより帰国の途につきたいと思存いたします。
その難升米の言葉に、洛陽の都の朝臣達は
ロ々にこう言った。
「名残り惜しいは私達とて同じです。いか
し、君のような純忠の士を、幾月かの間とは
いえ、この洛陽に留め置いたことは、我等が
大いに喜びとするところであります。」
「ではお二人共、はるかな東海の島への
道中、何分にも十分気をつけて行かぬかよい。
こうして都人達は洛水の岸辺に横づけされた豪
壮な船に乗り込み、率善中郎将難升米らを見送
ったのだった。魏国の天子からの賜与の品々
も、もうすべて船内に運び込まれていった。
魏国の威光を示して余りある麗美な船は、
洛水船着場をゆつくりと離れ、
黄色い龍旗が川風を受けて船首に翻り、五
彩の鮮やかな船楼がたとえようもなく美しい
面に映し、船は、舳子の掛け声も勇ましく
飛沫を飛ばしなから悠然と進んだ。
浮橋の上に立って、いつまでも見送って、小

1411^P

る洛陽の人々の打ち振る手が
小さくなつてゐた。

＊

1313.10.75(14) 不惑の年 → 14/10/14
 夕陽に此花の川面や 明滅云2166
 海が流る。

1314
 2233 1992

1412

あまた 58

せいち 精緻云1226
 「目」二の頁114

云530

か 幻 趣 的 に 明 滅 し た 。
 き く 真 赤 に 輝 き 見 渡 す 限 り の 川 面 の 波 の 端
 せ か さ れ る よ う に 急 い で 落 ち て 行 く 夕 陽 は 大
 華 の 都 よ
 え て い る だ け だ っ た 。
 あ あ 麗 れ ば 洛 陽 の 都
 かし 今 は も う ー あ の 洛 陽 城 を 内 懐
 隠 す か の よ う に 遮 り 立 つ 山 々 の 山 な み が 見
 角 も 見 つ め つ づ け た 。
 難 升 米 は 目 を 凝 ら ー 洛 陽 の あ る あ ち の 方
 太 陽 は 西 へ 大 き く 傾 い て い た 。
 流 水 を 下
 刀 ・ 錦 な どの 数 多 の 品 々 と も に 洛 水 の
 魏 国 の 天 子 か ら の 賜 わ り 物 で あ る 銅 鏡
 率 善 中 郎 將 衛 升 米 と 率 善 校 尉 都 市 牛 利 と は 下
 ま さ に 精 緻 の 極 み と 絢 爛 華 麗 な 洛 陽 城
 トル ま じ ゃ ない 530
 530 帰 心 矢 の 如 し
 120 絢 爛 華 麗 な 洛 陽 城
 475 洛 陽 城

顔 99 下ていた 1413^P

え 475^P

へ名都洛陽城。華舌に尽し難い荘嚴な都。

邪馬台国に築か小るべき大

華震な洛陽の都よ

大任を果たして帰途についた難升米

の胸の内には炎のような熱い思いがいよい

よ激しく燃え上っていた。

早く帰りたい。早く帰って、あの洛陽の

都とそっくり同じ美麗な都を、邪馬台国に築

きたい

はりさけんばかりの思いを抱く

その船は、気が遠くなるほど

ゆく黄色い黄河の流水の只中を

ていった

雅やかに

乗る船は

るすかのよう

に

ゆったりと進む

に

に

に

1409^P
131^P
おの都

漢の初代劉邦

帶石郡太守弓遵

遵中遵奉

幾日も幾日も船の旅がつづいた飾り立て

た魏国の船は黄色い砂の微粒子を含んで

黄色くみえる広漠とした黄河の水の流水に

乗って下流へ下流へと進んでいく

かしさすかの大河も、
やかて海に注ぐ。

河口には、なだらかな陸地が、海中に延び

7
いた。
その水は、
黄河から吐き出される黄色い細か

な泥や砂が少すつ堆積して自然に形成

上
 水
 た
 も
 の
 だ
 っ
 た
 え
 353
 た
 り
 っ
 ぽ
 う
 な
 か
 い
 て
 い
 き
 い
 う

 ヲ、
黄河から大量に流水出る黄色い

濁水は、渤海の紺碧の大海原にくっきりとーた、長

ま い 長 い 黄 色 い 線 を 描 き
な が る た よ つ い に は
朝 日 前 開 張 中 五 五 五

間
に
消
え
入
ら
ん
は
か
り
に
流
水
漂
た
一
日
付
黄
河
行
き

中国大陸の方からの追風を受けて、船は真一文

字に帶方郡衙(沙里院付近)を指す

東半島を左に見ながら漕ぎ進むと、帯方郡か

前方に大きく広がって見えてきた。

こ
う
し
て
つ
い
に
再
び
見
覺
え
の
あ
る
帯
方
郡

難升米達は再び

リハ人 711
吏人・吏
と記す。

1415^P

「沸くばかりの」
水 9^P

郡衛=郡司の庁 665^P
郡司 666^P 地方行政官

古代朝鮮 48^P
紀(北) 351^P
世王の生現 299^P

魏太後 49^P 左端 11^P
前 2^P

新太守・弓濲に次のように報告した。

は倭国からの朝貢の一行に心きいた吏者を付

けて都へ上らせたのであったが、その吏者は

前年(二三九)六月、帯方の太守劉夏(鄧夏)

の景初三年

と改元さ小ていた。

年(はすでに改まり)正始元年(二四〇)

復興急な帯方の町は、沸き返るほど賑わし

兵馬の力もみなぎって、意気盛人だった。

を頼りせねばならないのである。

新任の祝意を述べ、さちこれからの一層の昵懇と好誼

深謝し、帰国の途中のこととして疎略ながら

この度の朝貢における多大の恩義に対して

新太守に拝謁の爲、郡司の庁へと向かった。

弓濲が帯方郡太守となつて、いた

難升米等は

へと無事到着した。

劉夏(鄧夏)に代わって

紀では鄧夏

神功皇后

元 2014

こと
自由でいられることを。
大の失態になった。

1,417
1110
164
1224
1224

ものもの たいそう なる
物々(219) 大層(な) 1341
1745
1133
侍王 貴人のそばに立つと

か 山と侍立しており、大層な物々しさがあった。
魏国帯方郡の権勢を誇示し、威厳を保つ。
難に配され、米と都市牛利とは、迎えうけて、
大難升米は、いまや率善中郎將としての
重みを加え、概の凛たるものを備えていた。
古来の殷・周・漢代の礼儀作法をたくみに取り入れたその一挙一動は、鮮やかであり、優美でさえあった。
情味をたたえていた。
太守弓遵は、二人の挨拶が済むと、こたび
の朝貢を慶賀してこう言った。
「ははは、さても士で、よくを務め、は
たして、ようこそ無事に戻られた。先帝崩御
の後、に帝位を継いだ天子は、いまだあまりに
も幼い。ゆえに引見の等々、あるいはか
なりゆめ、ことかも知れないと、危惧しておったが、
吏の語るところによれば、其方等の遠路をも

なる 539
なる 1133
なる 1341
なる 199

あな 936

1.418^P

かつて卑彌呼に成り代ははかいか
ひもた 一方

こと

三國志I(巻)
273^P

字の仲達と書くべきものを
ない。

567^P

傳司馬懿殿も、いたくお喜びであつたといふ。太
めであつたことよ。し
■すると難升米は、うやうやしく再拜して
恭敬の意を表わすと、こう言つた。
「こうしてこの大任を果し得たのは、い
までもなくひとえに帯方郡からの並並ならぬ
お心入水があつたおかげでございます。
本当に有難く、感謝の申し上げようもござ
いません。倭国の女王卑彌呼の使者なる私、不
束ながらも倭王に成り代わりまして、ここに
厚くお礼申し上げます。
「いやいや易い御用であつた。こ水を機
に、こ水からは気軽に來臨されるかよい。大
海をはさんで、魏国と倭国とは、いまや天
を同じくし、契盟を誓う者同志となつたわけ
です。以後、心を一つにして、互いに助力し
合おうではありませんか。
■帯方の太守弓満は、まさに手をとらんばか
りの親しみを込めて言うのだった。

官職 494^P

以上 351^P

梯僦

590^P

82^P

1.419^P

1393^P

儀 547^P

371^P

2/11^P

身仕舞 491^P

近侍 601^P

さて太宰守^{たさいしゅ}は、近侍^{きんじ}の者に一通^{いっとう}の書状^{しよじやう}を
 持^もつてこさせ、これ^{これ}を受け取^とると身仕舞^{みしまい}を正^{ただ}
 し、おもむろにこ^こう言^いつた。
 「これは魏^{えい}国の天子^{てんし}から倭王^{わおう}へ宛^{あて}てた詔書^{しよしよ}
 です。もうすでに御承知^{ごしょうち}のとおりで
 倭国^{わこく}の女王卑彌呼^{ひみこ}を以^もつて親魏倭王^{しんえいわう}と爲^な
 し、金印紫綬^{きんいんししゆ}を假^{かり}すことにあひなりまし^し
 今^{いま}までとは打^うつて変わ^かつて、太宰守^{たさいしゅ}の聲^{こゑ}は
 嚴肅^{げんしゆ}な威嚴^{いげん}のある語調^{ごてう}となつていた。太中^{たうちゆう}は
 こ^こで一息^{ひといき}つくと、さうにこ^こう言^いつた。
 「率善中郎將^{そつぜんちゆうしやう}難升米^{なんしやうみ}殿、ならびに率善校尉^{そつぜんぎやうじ}
 都市牛利^{としうり}殿が、倭国^{わこく}へ御帰国^{ごけいこく}の際^{とき}には、
 わが帶方^{たうほう}郡^{ぐん}の官吏^{くわんじ}のなかでも特に儀法^{ぎほう}へきま
 り・おきて一^{ひと}について明哲^{めいてつ}な建中校尉^{けんちゆうぎやうじ}梯僦^{ていきう}、
 他^{ほか}数名^{すうめい}の者を遣^{つか}わし、帶方^{たうほう}の東南^{とうなん}大海^{たいかい}海中^{ちゆうちゆう}に
 絶^{せつ}在^{ざい}するとい^いう貴国^{きこく}までお二人^{ふたり}をお送りさせ
 た^たいと考^{かん}えてお^おります^す」
 建中校尉^{けんちゆうぎやうじ}梯僦^{ていきう}でなく
 神功皇后^{じんくうこう后}紀長政^{きちやうしやう}四十年^{しじゅうねん}条^{じョウ}には、「建
 中校尉^{けんちゆうぎやうじ}梯僦^{ていきう}と記^きされ^るている。ど^どうが正^{ただ}しいのかは不明^{ふめい}
 であり、また建中校尉^{けんちゆうぎやうじ}（建忠校尉^{けんしゆぎやうじ}）かどのよ
 うな官職^{くわんしやく}だ^たたのかについて詳^{しやう}らかでないで

134^P
1121^P 手紙 書簡

1.420^P

校尉小林 509
護衛 964
武官 960

いんよう
えんよう
文 (36) えん 361
事 (17でづくり) 491

文官？

紀上 352
75 39

改行

① 1374
但 たⁿ
し

1938

小抹 509

建忠校尉の建忠は、不詳。校尉は、文官

7
あ
2
L

と
リ
う
。 (7
日本書紀
L (上) 日本
古典文学大系

岩波書店、三五頁、三九參照。

因みに述べると「建」という字は、**律**（法律・律の

省略形)と又(朝廷・廷の省略形)との合字

てある
う
漢和辞典
小林信明、小

学館 建造 参照

校尉は、漢代以後設けられた官

天子・王族を護衛する武官である

とすゝ説せつも
ある

漢和辞典
小林信明
小学館
校尉

参照

こ
こ
に
お
り
て
太
守
弓
邊
は
更
に
改
ま
り

威儀を正し
重々しく
言つた

建中校尉梯儂らば
 詔書
 印綬を奉じて

倭国へ至り、女王に拝假し、魏国の天子の詔

倭国への下賜の儀をとり行^なう仕儀

とあ
い
なり
ま
し
よ
う

号一 太守は、ずらりと並んだ群臣の方に

言外の情趣
なお深く感じらるる風情

1421P
1389-1/3 立居振舞 1376P
高雅 1384P 名代代理
2282P

1421P

礼部 2134P
華元は数年前に親のものとす
都凡 2134P
小林 291P
官史(カマリ)小林 302P
1412P

余情 太字がこういつて紹介すると、貴人の風につ
刀・鏡・采物等を賜うことにあいなりますし
り・天子のおことはを齎し、金帛・錦・麝
倭王に拝假して金印紫綬ならびに詔(みこと)の
魏国の天子の名代として梯僦が倭国へ詣り
「倭国からの客人よ。この者が梯僦です。
その立居振舞は、実に美しく、流れるよう
に見事であった。」
と、太字が梯僦は、太字の前でひたりと止まる
うやうやしく、礼をつくして挨拶した。
洛陽の都から下ってきたの、あろうか。
ものがあつた。あるいは、太字弓庫に招かれ
端整な容姿には、洗練された都風を思わせる
涼やかに歩を運ばせてくる梯僦の、その
向かつてその名を呼んだ。
「建中校尉梯僦、ここへ来るがよい。」
肅然と控える官吏庫の中から身み出て

丁字 1391 $\frac{1}{2}$ 411
丁字 1394 1311

つまねた大使・建中校尉梯儁は、さわやかな笑みを浮かべて言った。

「率善中郎將難升米どの、および率善校尉都市牛利どのの御二人を御送りし、詔書印綬を奉持して倭国へ詣り、卑彌呼女王に拝假するようにとの命を受けました梯儁です。

何分にも私にとりましては全く勝手のわからない旅ですので、今後どうかよろしく御別懇のほどお願い致します。」

そして、丁寧^{ていねい}に会釈した。

難升米^{なんしやうみ}たちは、こうして太宰^{たいざい}の海^{うみ}のはからいにより、建中校尉梯儁^{けんちゅうがうていけん}と共に倭国^{やまと}へ向かうこととなった。

米

ところで、難升米^{なんしやうみ}たちの帰国と、梯儁^{ていけん}等の来朝との時期^{とき}関係^{かんけい}について、次のような見解がある。

文英堂、二九四頁参照）

魏帝^{みけい}から後の女王への詔書^{しやうしよ}の末尾^{まつびつ}近くに、

1,422^p-²/₂

魏志倭人伝 50' 6' 9"

魏志倭人伝 50' 2' 9"

曰 皆 (下賜品全部) 装封して難升米・牛
利に付す (与えらる) といふ
という記載が見られる。
しかなからず 実際には さら 丁重な牛続
きを経て 倭国へもたらされたのである。

すなわち 倭の女王への 詔書 装封して 帯方の太守に付し 假授せし
を假し、装封して 帯方の太守に付し 假授せし
を假し、装封して 帯方の太守に付し 假授せし

とあり、
② また、魏志倭人伝、正始元年 (二四〇) 条に

夫つて改行

セ王の出現294P

ニと

1.423P-1/2

小林930P
賜仍
休飯をいたしたく
同1421P
同193P
同1538P-1/2

同1294P
同1419P

という。(「女王国の出現」小林行雄、文英堂、二九四頁参照)

正始元年、太宰弓遵、建中校尉梯儁等、遣わし、詔書・印綬を奉じて、倭国に詣り、倭王に拜假し、ならびに詔を齎し、金帛・錦・刀・鏡・采物を賜う。倭王、使に因つて上表し、詔恩を答謝す。とあるのが、その実情であつた。

これによれば、魏帝の詔書や下賜品は、景初三年(二三九)の翌年の正始元年(二四〇)にいたつて、帯方郡太守の使者が倭国まではこのできたことになる。おそらく難升米たちも、これに同行して帰国したのであろう。

金帛・錦・刀・鏡・采物と略記してある品目のうち、帛は赤・青・白の三種の絹織物をさし、采物は彩物すなわち朱と鉛丹とをさすとは、りうまでもない。

難升米たちの帰国が、景初三年の翌年になつたといふことに、不審はあるまい。云々

1423^P-2/2

という。前頁22行



つまり、

「^{ていけん}梯^{なと}等^ちは^{とも}難^わ升^く米^{いた}たちと共^だに、倭^わ国^{こく}へ請^{いた}った

のであろうし

というのである。



以下、この^{かいしや}解^{かい}釈^{しや}に従^{したが}って、^{すす}話^わを進^{すす}めてゆき

たいや

*

1. 症 1134 (26) 一時 1819 紙 紙 192^p
 2. 1610^p 1408^p 改行

振舞 1971 止 453^p 宴 2088^p 1,424^p
 1323^p 1656^p 328^p 191^p 和紅薯 云 321^p

あまいは、帯方郡太守弓遵は、倭国へ
 帰り行く難升米と都市牛利との爲に
 の場を設けたのではなからうか。
 日本書紀によると推古十六年（六〇八）八月十六日に隋の客
 等を朝で饗食したのち九月吾に難波の大郡で再び饗食
 応じたというが、これは二二二九年の魏国の朝で
 の飲待に引続く帯方郡での再度の飲待に倣
 てることなのだろうと考える。また、
 難升米たちは、帯方郡でのこの宴饗食を感謝し
 太守から勅められるままに酒宴の座についた。
 魏国の朝臣達も難升米たちも酔い酔い水るほどに
 まで酌み交わして愉悅の一時を共に過ごした
 宴は華やぎ、和氣藹藹の席を同じくした帯
 方郡の官吏達は、神仙の国からの客人に
 杯を重ねさせては真剣な目差いで、
 長寿を保ったために何を食しているのか
 などと、しきりに尋ねた。
 一方、未知の国へ下ってゆくこと
 になった梯儻は、面には出さないうちから、
 名残りのつきない思いを噛みしめていた。
 天子の名代としての我身の
 尊厳を辛くも保持し、優美に華艶に振舞うのだ

$$H_{30}(2018) 3, 21(\text{K}) \sim 3, 23(4\text{B})$$

⑤ $2156' - \frac{1}{2}$
 4个 (⑤) $960'$ 伊香刀美 $1425'$
 ⑥ $964' - \frac{1}{2}$

$\alpha = 4$ 元
 身 210

赤 968^r - 1/2

主
図表やか 1687^p

559^p 2156^p 「あまのこ」 額 1 行

った。
 こうして、嘯々たる奏楽裡、盛大な送別の
 宴はいっはでるとも知れず賑やかに続いてゆ
 き、帯方の夜がふけていった。
 尚、もしかしたら、こうした時に――――難升米
 （中臣伊賀都臣）と、一人の美しい女性とが、
 急速に親しくなっていくたのかも知れない。
 こゝに、粹な太守のはからいによつて、
 升米は、その女性を娶り、――彼女が、難
 升米の子を身籠ったのであらう。
 〓そして、十月十日ばかり後に生まれたのか、
 本大臣（中臣栗原連子公の祖）であつたよう
 に推察される。（第十三章へ伊香刀美の項
 におい）（既述）

→ H3.10.10 (木) ⑥

1833
逢萊 2025 1426 P

1619
 船尾 「左にみちがさ」 ⑤1414

帯方郡を後にして

薄らに別水を告げた。
■数日の後、難升米達は梯嶋と共に太守弓

低くはなだらかな山また山のうちつつく帯
 方郡の丘陵が左手にあった。船は南へと下つ

ていつた。
梯子は、
艦に立って、
西方・黄海の
かなた

へ
 あ
 あ
 我
 か
 ぶ
 る
 さ
 と
 の
 父
 よ
 、
 母
 よ
 ー
 ー
 ー
 私

は帯方郡に来て、
~~さくら~~  ままた  東南大海

の中に在るといふ遠い蓬萊の国に倭国と
 赴こうとしております。

行も出来ず、年老いた御二人を残して行くの
に父・母のもとへ帰ることにして、ようや
親孝

は辛うございまして。何かし、これ私が私に課せ
られた務めであります。運命なので、しょう。とう

か
あ
許
し
下
さ
い
V
う
か
父
母
の
妻

息が詰まるような胸苦しさを覚えた梯儼は、

12000里 航路43°
(金) 1475° 40m
の国 (2) 480000m 480km
(日) 1429° 1474°

1427°

改行

131°

おいて

思わす知らず涙^{なみだ}していたで

・ 梯^{てい}偶^ぐ殿^{でん}、見^み当^{あた}らぬと思^{おも}うたら、このような

ところにおいでした^か

・ 声^{こゑ}の方^{ほう}を振^ふり向^むくと、それは難^な升^と米^みだつた。

・ 難^な升^と米^みは、梯^{てい}偶^ぐの頬^ほに白^{しろ}く光^ひるものを見て

一瞬^{いつしん}はつとしたか、^いか^いさ^いり^りげ^げなく言^いった。

・ 梯^{てい}偶^ぐ殿^{でん}は、夕^{ゆふ}のキラキラと輝^{かがや}く海^{うみ}を見^みて

おられたのですね^し、^いか^いな^なた^たの^の水^{すい}平^{へい}

線^{せん}にいままさに触^ふれ人^{ひと}はかりに傾^{かたむ}いた太陽^{たいよう}が

空^{そら}と海^{うみ}とを鮮^{あざ}やかな黄^き金^ご色^{いろ}に染^そめ上^あげて

この上^{うへ}もなく美^{うつく}しうございます^し

・ 梯^{てい}偶^ぐが黙^{だま}つてうなづくのを見^みて、難^な升^と米^みは

さらに続^{つづ}けた。

・ 倭^わ国^{こく}への旅^{たび}が、こ^こんなにま^までも

幸^{さい}先^{さき}良^よく始^{はじ}ま^まったのは、海^{かい}中^{ちゆう}におわす

龍^{りゆう}神^{しん}の慈^{いつく}し^しみ深^{ふか}い御^み心^{こころ}のおか^かげに違^{ちが}いありませ^{せん}で

・ 堪^た方^{ほう}郡^{ぐん}の郡^{ぐん}衙^がから女^い王^{わう}国^{こく}ま^までの萬^{まん}二^に千^{せん}餘^よ

里^りのこの旅^{たび}は、きつと快^{かい}適^{てき}なものと^{なる}

でし^しよう^{よう}

・ 梯^{てい}偶^ぐは、難^な升^と米^みの顔^{かお}をま^まい^いま^まいと凝^{ぎやう}視^しした

・ 入^い帯^{たい}方^{ほう}郡^{ぐん}の郡^{ぐん}衙^がの地^ちから、女^い王^{わう}国^{こく}の都^{みやこ}まで

「に」が多い

1.428^P

「かなた」④1426°8分
たもと
壁へ

434m
12000里
5208km
868
436
08,000m

とであつた。(漢和) 辞典「小林信明、小学館、末(尾の二四頁の表参照)

の距離は、萬二千餘里もあるのであらうか

・それは、途方もない距離に思えるのだった。

・なにしろ、当時の魏の一里は今の四三四分は

したかつて万二千餘里といえは五二〇

ハキ以上もの遠さである。

・たとえば、洛陽から帯方郡までの距離

(直線距離)は約一二〇〇キだから、この

四倍以上もの遠いところに女王国があるとい

うことになるうで

■梯儼は、倭国が東南大海沖の絶域になつた

あるとはかぬより聞き知つては、萬二

千餘里もの遙遠の地へ

と思つと、――ますます心細さがつのつて

仕方がなかつた。

■その不安げな様子を見て、難升米は言つた。

「なあと、この追ひ風に乗つて行けば、あ

つと川う間に倭国へ着きますよ」

・船ばりにたたむ梯儼を励まそうとして、難

升米はにこやかに、事も無げにさらりと言

うのだつた。

※

①432°-7/4 9/19
 47° 150 km = 140 : 7 緯度43° 南緯の位置が 75' の目
 12000 1427° 1474°-1/2 (通常の解釈) ①426° 6' 行
 450,000 m 1475° 450,000 m 12,162 里 ± 4 里
 ①467 1429 ①474-3/4 ①426° 6' 行

船は、末広りの水紋を描きながら南へ
 南へと進んでいった。
 左手の馬韓の山々、海に浮かぶ大小の島々、入江、
 海浜沿いの村々、磯辺の海女、漁師の操り小舟など
 が、次から次へと現われては、後ろへ遠のいて
 ゆく。
 そんな日々が、幾日も続いた後、ついに
 船は、朝鮮半島の西南端に至った。
 ここで船は、東方へ進路を転じた。
 東へ東へ、まっすぐに船は進む。
 日、難、千、米、は、遙か前方を指さし、なかう言った。
 「ほら、あれが狗邪韓国の町ですよ。
 郡の郡、倭から女王国の北の境界線に至る距
 離は、萬二千余里、帯方郡の南限の郡境から歩
 いて、狗邪韓国の国衙に到る距離は七千余里、
 と我々は言いならわしております。」
 帯方郡から朝鮮半島南岸までは、魏の尺度
 測って、ほんの千余里（一里、二里、三里、四里）ほど

7000 里
 260,000 m

南緯地月で
 500 km は

同文前頁 3 行

1819 波は、人輪状の紋
 177 177
 232

①426° 6' 行
 南へ

秋史後39 秋史後43

リてい 2316
里程 2316
改訂

1430
秋史後543
296

秋史後 31
43

① 帯方郡から女王国までの距離は、萬二千余里
② 帯方郡から狗邪韓国までの距離は、七千余里

というのである。
か
おかしな事だ。聞き違えたのであろう

・梯偶は小首をかしげた。しかし梯偶には、倭国に於いての見聞を有るがままに報告する義務が課せられていたのかも知れない。

へ恐らく、魏国の里程と、倭国の里程とは違うのであろう

梯偶はこう考えて、もやもやした疑念を抑え込み、自らの心を納得させるのだった。

そして、覚え書きとして、こうしたためた。

「郡へ帯方郡」より倭に至るには、海岸に沿って水行し、韓國を歴て、乍は南、乍は東す。其の北岸狗邪韓國に到る七千餘里。郡（帯方郡）より女王國に至る萬二千餘里」

*

秋史後 43 29

魏志 卷2 新 1394 P
① 1432 1/69 ② 1394 1097

1.431 P-1
魏志 卷38 新 37
① 1393 ② 1395

おぼろの和馬台 160
「和馬台」授一雄至文堂 227
シロジメ和馬台 47

① 1432 1/69 ② 1394 1097
「到」至

到と至

魏志倭人伝では、次の五ヶ所に、
到の

字が用いられてゐる。

郡より倭に至るには、海岸に循つて水行し

韓、国を歴て、乍は南し乍は東す。其の北岸狗

邪韓、国に到る七千餘里。

東南陸行五百里にして、伊都国に到る。

其の年、景初三年（二三九）十二月、詔

書して倭の女王に報いて曰く、親魏倭王卑

彌呼に制詔す。帯方の太守劉夏、使を遣わし

汝の大夫難升米・次使都市牟利を送り、汝献

する所の男生口四人・女生口六人・斑布二匹

二丈を奉り以つて到る。還り

到らば録受し、悉く以つて汝が国中の

人に示し、云々」と。

其の八年（正始八年（二四七））太守王

頌官に到る。

そして、この五ヶ所以外のところでは

シンポジウム邪馬台国
初版 昭和41年8月15日

牧健 = シンポジウム邪馬台国 39p にあふルビ無し

シンポジウム邪馬台国 ルビ無し
39p

「まぼろしの邪馬台国」
研究助成
記載あり
7.431-2/2

大巻 箇所、箇処 (箇所)

初版 昭和42年1月24日

「まぼろしの邪馬台国」

まぼろしの
152p

末尾に
ルビあり

一二。頁参照)

(*)

いや
37頁下

宮崎康平氏は、こう言う。
「倭人伝中の伊都まで記載された文中に、
まだあまり学界ではとりあげられていないが、
注意すべき二つの文字がある。到という文字
と、至という文字である。
単なる方向であることは、説明の必要もある
まい。ただ使つてある個所が問題である。到
は、口其の北岸狗邪韓国に到る七千余里」と
いうところと、口東南陸行五百里、伊都国に
到る」という二箇所にあつて、――
と述べている。(「まぼろしの邪馬台国」宮
崎康平、講談社、一六〇頁参照)
*なお、魏志倭人伝において、
「初に注目の文字が使ひ分けられてゐるこ
とに、石井良助博士もこの使ひ分けを重視した
という。(「邪馬台国」榎一雄、至文堂、二
七、二二六頁)「シンポジウム邪馬台国」石井良助、創文社

H24.7.27 ④ 4エック④

極小の
お打し下
さい。

2-543^{F10} 2-524¹⁷⁹ 1-251^{上49} 1-297^{下17}
1-94^{上69} 2-531¹⁴⁵ 1432-27

原文 1-286^{下15} 1-393^{左194}

2-616^{F3} 2-585^{下7} 1-338^{上17} 1-338^右 1-217^{上12} 1-393^{上12} 1-217^{上12} 1-95^{上17} 1-89^{上17}

(司馬懿)

地見え

到洛水浮橋北 (魏書九 資料①一二七頁上十二行)

宣王 疑京師有變、乃馳到入見帝 (魏書三 資料①一九五頁上五七行)

到長安 (魏書十五・十九、蜀書十 資料①一三三八頁上十七行。同①一三九三頁上十七行)

到壽春 (魏書二十八 資料②一五二頁下六行)

到遼東 (魏書三十。資料②一五八頁下七行)

到漢中 (蜀書三。資料②一六六頁下三行)

などとある。

(陳寿の文中)

一方、三国志の本文には、

至洛陽 (魏書十三・十九。資料①一六六頁下十五行)

至長安 (魏書十一・十三。資料①一二五頁上四行。同①一二九七頁下一行)

至壽春 (魏書二十八。吳書二。資料②一五二頁上十七行。同②一七五頁上十二行)

至遼東 (魏書三。資料①一九四頁下十九行)

至漢中 (魏書二十八。資料②一五四頁下十行)

などとある。

こうしたからみて

魏略の著者である魚豢は、

へある地矣へ到達するときには、

立意が働

資料①は、三國志(一)汲古書院下第三刷発行

資料②は、三國志(二)汲古書院下第二刷発行

を指示す。

如力1835 三〇友1-110^p492^p(河内地図) 阪内
 阪内(寝室) 原又1-94^p 帝の驛馬は(宣王) 又(引)る
 1,432^p-3/7
 河内 ①1103^p-3/2 地図に無
 河内 ①1103^p-3/2 地図に無

類 ①1433^p-1/3

文 三國志(一) 筑摩書房、第三刷、一一〇頁上段。同四九二

といいた答だと認めて、
 たのであろう。
 一か、三國志の著者である陳寿は、
 へある地矣へ至ったことに、格別大きな意
 図が認められない時には、至を用いたの
 ころう。
 と考えてみる。と
 三國志の記載中、短い文のな
 かに「至」と「至」の字が混在している例を
 いくつか見てみる。と
 ①景初三年春正月丁亥、太尉宣王還至河
 内。帝驛馬召到。引八畝内。執其手謂曰。
 へ司馬宣王が(遼東から)帰還して、河内
 (洛水と黄河との合流)より少し下流の司馬
 氏の拠点に至ると、明帝は早馬によって彼を召
 しよせ、洛陽に到るや、寢室の中に引き入れ、
 手の手をとって、云々。(魏書三、陳寿の本

コクヨ ケ-20 20X20

河内 三國志(一) 1-448^p下ルに布子 776
 東洋史評 357^p

三〇大 辰 2-585⁷

三〇大 辰 2-585⁷
三〇大 辰 2-302⁷
三〇大 辰 2-585⁷

三〇大 辰 2-807⁷
三〇大 辰 2-108⁷
三〇大 辰 2-106⁷
1.432-4⁷

頁の地図参照

②燕乃遣将秦開攻其西方取地二千餘里至滿

潘汗為界。朝鮮遂弱。及秦并天下、使蒙恬築

長城到遼東。

〔燕〕部將の秦開を遣わして朝鮮の西部地

域を攻めさせ、二千余里の土地を奪ひ、満

汗に至り、今の博川江をもつて燕と箕子

朝鮮との境界とした。箕子朝鮮は、これ以後

力を失つていつた。秦が天下を統一すると、

蒙恬に命じて長城を築かせ、その工事は遼東

に到った。

〔魏書三十、魚豢の「魏略」。

「韓國古代史」(山李丙燾、一三八頁)

③慈自遼東還、未與相見暫渡江到曲阿見繇

未去会孫策至。

〔太史慈が遼東から還つて来た当初には、

まだ面会する機会がなかった。〕

くして太史慈は長江を渡り、曲阿に到つて繇

繇大目通りした。劉繇のもとを立ち去らぬう

ち、たまたま孫策の軍が至るのに出会

った。〔吳書四、陳寿の本文曰 三国志四(四)

并
蒙
滿
漢
吳
マ
ン

筑摩書房、第一刷、一〇八頁上段参照)

1.432^{p.5}-7

はてせん
漫然
①1432^{p.7} ②1433^{p.3} 漫然 2100

*

なにかある。もとの多くの例をあげる。とか
できるが、キリがないので、このくらいに
止める。これらの文献において、
ともあれ、**「至」と「至」**の間、大きな差
異はないように見える。
しかし、あえていえば、
「(1) 至」は、はつきりした目的や意識をもって
する場合、
「(2) 至」は、漫然と述べる場合、
に用いられている。この感じはある。

新史稿
284
「三〇走」
陳寿の撰
云 1258
撰
云 1260
撰述

魏志遠 17th

改新

新

1.432^P - 6/7

支钱 17

118

參照

という。
〔岩波文庫〕
四三七〇、
岩波書店、
一七頁。

な
お
い
う
ま
で
も
な
く、

魚券は、魏の時代のことを書いた種々の文献を

とりまとめて、
魏略
を編纂した

と解乏水子。

即ち、曰魏志倭人伝の(本来の文章は、魏

の時代の
ある人
によって書かれた
といえよう。

魚券は、倭国について記述された文献（魏志倭人伝）の原本というべ

き書類。その他
と理解される。

魏略を著述した

それでは、魏の時代の
 と「至」の字を、どうい
 う^{エフ}う⁵²⁹基準^{キジュン}によ^リ
 う^{エフ}う⁵²⁹か。
 それば、もちろん詳らかに
 しかしてここに予め述べ

1,433^P - 1/3

④1470^{5/6}

改行

④1432^{5/6} ④1432^{5/6} ④1432^{5/6}
漫然 漫然 漫然
は主目的を達成と持たぬ
地盤 深く考えない

(1) 大きな目的と目標をもって、人が陸行する
ときには、^{え 2186^P}「^{え 2187^P}到^{ひょう}」の字がふさわしい。
(2) ^{え 2314^P}「^{え 2314^P}しかしただ単に^{たん}」ある地点から国境までの距離
を述べるだけの場合には、^{え 2314^P}「^{え 2314^P}至^き」の字がふさ
わしい。
(3) また、^{え 2314^P}「^{え 2314^P}船には意志^いが無い^な」のだから、^{え 2314^P}「^{え 2314^P}水行^{すいこう}」
するとときには、^{え 2314^P}「^{え 2314^P}至^き」の字がふさわしい、
と考えたのかも知れない。

其の北岸約邪韓国に到る。船でなく人が歩く

④1432^{5/6}

出奔 元 1068^P

其の北岸狗邪韓国

氣きにき蒔まちま蒔まれれてていた。
 陽やう氣きな人々ひとの聲こゑは弾はじけん
 活くわ

はかりであつたし、津へみたと一は丁度まさ
 に出帆し、よう、と潮時を待っている船や、荷下ろし作業中
 の船など、大小の船・船・船で、いっぱいだった

倭人がこの当時、朝鮮半島南端において極

あて 大きな勢力を持ち、弁辰で雇出するわけ

すでに述べてある。(第十二章) 狗邪韓 國 奪國 の項において既述

今倭国には旭日の昇るような勢いがある

大陸の文物が、
朝鮮半島南端の
洞卷の狗邪韓国を
経由して、多くの
倭国へ

渡
フ
了
ゆ
く
の
たⁿ
フ
た
0

あ、とうとう倭国へ帰ってきたぞ。何

と我が祖国の言葉の
思ひ返せば、
~~思~~
昨年の夏に倭国を
発して

H30(2018)3.22(木)~3.23(4回)

H30(2018)12.28(土)~12.30(3回)

令和元(2019)5.30(木)~6.1(4回)

令和2年(2020)1.2(木)~1.4(4回)

令和2年(2020)9.12(土)~9.14(4回)

1.433^P-3/3

心 地 184^P 徳 かい 1660^P

HIV 三 1344^P 1961^P

踏んだ難^な4米と牛利^{ごり}とであつた。
「ほんとうに、倭^わ国の^{トル}風^{ふう}さえもがなつか
しく、身^みに染^しみ透^とるようでございます。
それは、あたたかくておだやかな春^{はる}の風^{ふう}
だつた。



9/11 F 9/13
9/13